

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 28 年 9 月 4 日現在

機関番号：32617

研究種目：若手研究(B)

研究期間：2013～2015

課題番号：25780220

研究課題名(和文) 19・20世紀華北におけるドイツ帝国主義と鉄道事業 グローバル化の視点から

研究課題名(英文) German Railway Imperialism in North China in the Late Nineteenth and Early Twentieth Centuries from a Globalization Perspective

研究代表者

浅田 進史 (Asada, Shinji)

駒澤大学・経済学部・准教授

研究者番号：30447312

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 1,800,000円

研究成果の概要(和文)：本研究は、19世紀末から20世紀初頭の華北地域におけるドイツ鉄道事業、とくに山東鉄道事業を分析したものである。19世紀末以降、山東経済は、麦稈真田や落花生などの農産品輸出によって世界経済と密接に結びついた。その過程で、ドイツ資本によって建設された山東鉄道は、その物流を加速させる役割を果たした。この山東農産品の流通をめくって、山東鉄道と津浦鉄道との間で、またそれらの鉄道の輸出港であった青島と天津との間で激しい競争が生じることになった。本研究は、ドイツの未公刊史料を分析することで、上述の物流競争によって山東経済が世界市場の景気変動に作用されやすいものへと変化する過程の一端を明らかにした。

研究成果の概要(英文)：This study analyzes the German railway enterprises in Shandong, North China, in the late nineteenth and early twentieth century. From the late nineteenth century, the regional economy of Shandong province was closely connected with the world economy through the export of agricultural products such as straw braid and groundnuts. The Shandong railway of the German capital played a significant role in promoting the global export of those products. At the time, intense competition developed between the Shandong railway and the newly constructed Jinpu railway, and between their export ports Qingdao and Tianjin, for the distribution of Shandong's agricultural products. This study shows how the Shandong economy changed owing to the competitive situation to an economy easily influenced by the conjuncture of the world economy.

研究分野：ドイツ植民地主義、ドイツ・東アジア経済史

キーワード：ドイツ 中国 鉄道 山東 華北 植民地主義 帝国主義

1. 研究開始当初の背景

19世紀後半以降、世界規模で本格的に整備された汽船・港湾設備・鉄道・電信などのインフラは、各地域経済を結びつけ、世界経済の一体化を加速した。現在のグローバル化を歴史的に考察するために、19世紀の世界経済統合を、近年の一部の経済史家は、19世紀グローバル化ないし初期グローバル化と呼ぶようになっている。この19世紀後半から20世紀初頭の世界経済統合は、各地域経済のあり方を根底から揺るがし、変容を迫るものであった。この経済的衝撃に対して、各地域経済の政治・経済主体がどのような対応をとり、それがどのような帰結にいたったのかについて、実証的な研究が積み重ねられてきた。

このような研究潮流を背景に、本研究は、19世紀末から20世紀初頭のドイツ帝国主義による済南・青島間の山東鉄道（膠済鉄道）事業とその山東地域経済への影響、さらに山東鉄道と競合した天津・浦口間の津浦鉄道が華北地域経済に与えた影響を、世界経済統合の視点から検討するものである。

近代中国における鉄道網の形成過程については、国民経済統合の観点から千葉正史の大著が、また地域経済の統合と近代化については江沛など数多くの研究が存在する。さらに、中国東北地域については、大豆をめぐる熾烈な市場競争と鉄道事業との関連が議論されている。これらの研究が示唆するのは、世界経済統合が地域経済の近代化や統合を単純に促すのではなく、国際商品をめぐる世界市場での市場競争という要因が地域経済を再編成し、あるいは分断するという側面である。

帝政期ドイツに関する経済史研究においても、近年、C・トルプによって世界経済統合の影響が議論されるようになってきた。しかし、本研究に直接関連するドイツ帝国主義の対中国鉄道事業についていえば、1976年のV・シュミットによる包括的な成果があるが、旧東ドイツに所蔵されていた大量の未公刊史料は分析されていなかった。また、K・ミュールハーンの研究では、中国地方官僚による対抗戦略の局面に焦点があてられているが、世界経済統合の観点から地域経済への影響については分析が及んでいなかった。

山東地域経済史についていえば、近年では庄維民が鉄道をはじめとした近代化要因による山東市場経済の自己革新の諸相を論じている。ただし、本研究にもっとも示唆に富む研究は萩原充の研究である。この研究は、第一次世界大戦後の日本管理下の山東鉄道、すなわち膠済鉄道を舞台に、山東物産をめぐる日中間で激しい物流競争が行われたことを明らかにしている。しかし、山東には、落花生関連商品をはじめ世界市場向けの輸出商品があり、その物流をめぐるドイツ資本経営期の山東鉄道が果たした役割についてはほとんど分析されていなかった。

2. 研究の目的

研究代表者は、これまで膠州湾租借地におけるドイツ統治について、社会経済史的な視座から、とくに都市部青島に焦点を当てて分析してきた。このドイツ統治期の青島経済を支えたのは、麦稈真田・落花生をはじめとする山東農畜産物であった。しかしながら、山東経済と世界経済の結合を強化し、その地域経済に大きな影響を及ぼした山東鉄道については、部分的にしか分析できなかった。

したがって、本研究プロジェクトはこの山東鉄道事業を軸に、ドイツ側の未公刊史料・同時代文献を基に分析し、山東地域経済史の成果と突き合わせることで、世界市場向けの山東物産をめぐる物流競争とそれが地域経済に及ぼした影響について明らかにすることを目的とした。その際に、山東鉄道沿線および華北の対外通商拠点でのドイツ東アジア商社と地域経済との関係性、またドイツ・中国の政治主体との拮抗の諸相も視野に入れて分析を進めていった。

3. 研究の方法

研究代表者は、これまでの研究活動によって、日本・中国・ドイツの公刊・未公刊史料を収集・分析してきた。日本では、外務省史料館所蔵の『山東鉄道関係一件』などの未公刊史料および日本語同時代文献があり、中国語文献では台湾中央研究院近代史研究所から出版されている公刊史料、さらに、ドイツでは、外務省政治文書館所蔵の北京公使館関係史料およびフライブルク連邦軍事文書館所蔵の海軍省・膠州領総督府関係史料のなかの山東鉄道関係史料がある。

これらに加えて、本研究プロジェクトでは、いまだ未収集であった、以下のドイツ語未公刊史料を調査することが主眼に置かれる。まず、ベルリン・リヒターフェルデ連邦文書館所蔵の山東鉄道および津浦鉄道関連史料であり、またフライブルク連邦文書館の鉄道関係史料である。

さらに、山東鉄道の物流にかかわる商社や企業の動きをとらえるため、関連する民間の史料館とコンタクトをとり、基礎的な史料調査を予定した。

本研究は、基本的に研究代表者1名によって遂行されるが、これまでの研究活動で培ってきた人的交流を基に、日本・ドイツ・中国の研究者から助言・批判をえながら、研究を進めていった。

4. 研究成果

(1) 史料収集

本研究プロジェクトの主眼の一つであった史料収集については、順調に進んだ。まず、2013年度には、ベルリン・リヒターフェルデ連邦文書館所蔵の山東鉄道関係および津浦鉄道関係史料を調査・収集した。対象となったのは、R901/81233-81233 Schantung-Eisenbahn および R901/5010-5012 Tientsin-

Chinkiang Eisenbahn のファイルである。とくに、本研究で重要な課題である、山東物産をめぐる物流競争に関して、R901/5010-5012 のファイルが非常に有益な史料であることが分かり、史料目録を作成した。そして、2014 年度に再調査を行い、同ファイルについての史料調査・収集を終えることができた。

2015 年度には、華北におけるドイツ鉄道事業の地域経済への影響をより深く考察するために、ドイツ製品の対中国輸出の観点から、化学染料に着目した。第一次大戦前までに、ドイツの化学染料は中国市場で圧倒的な優位を確立していた。山東鉄道を經由する形での販路は開拓されていなかったが、将来的な市場としての期待と市場拡大の試みがどのようなものであったかを調査することとした。ルートヴィヒスハーフェンの BASF 企業史料館を訪問し、きわめて有益な基礎的史料調査を行うことができた。

(2) ドイツ植民地経済論のなかの山東鉄道

2013 年度にドイツ現代史学会第 36 回大会で、「19 世紀グローバル化のなかのドイツ山東事業 物流と植民地権力の関係を中心に」と題する研究発表と、2014 年度に小野塚知二編『第一次世界大戦開戦原因の再検討

国際分業と民衆心理』のなかで「開戦原因論と植民地獲得競争」と題された拙稿を公表した。

これらの発表では、第一次世界大戦以前のドイツ植民地経済論が、自国植民地に排他的な関税制度を設定し、本国経済と植民地経済を一体化させるのではなく、むしろ他の列強にドイツ植民地を開放し、同時に他の列強の植民地市場での原料調達およびドイツ製品輸出を確保するものであったことを論じた。

そのうえで、工業化するドイツ本国の食品加工業や石鹼工業、さらに潤滑油などとして植物油がきわめて重要であり、落花生や大豆・ゴマの輸入量が増加していたこと、西アフリカと並んで、山東の落花生が重視されていたことを明らかにした。この山東落花生を世界市場、とくにドイツを含む欧米市場へ輸出するために、山東鉄道が重要な役割をはたしていたことを指摘した。

(3) 山東鉄道と地域経済の再編

上述した 2013 年度のドイツ現代史学会大会発表に加えて、山東落花生に焦点を合わせる形で 2015 年度の第 15 回日韓歴史家会議で「ドイツ植民地経済政策における世界的視野 山東落花生から考える」と題した発表を行った。

これらの研究を通じて、以下の点を明らかにした。まず、膠州湾租借地のドイツ総督府が義和団戦争直後から山東のマメ科植物に関心を持っていたこと、なかでも落花生に期待を寄せていたことである。次に、山東落花生への対ヨーロッパ輸出は、1908・1909 年に急増しており、それがヨーロッパでのオリ-

ブの不作を代替することに起因したことである。それ以後、膠州領総督府は、租借地内での落花生栽培を促すなど、山東鉄道から青島港経由での落花生輸出の拡大を意図した政策を行っていた。そして、第一次世界大戦直前の 1913 年には、落花生・落花生油は青島港の中国産品輸出額のなかで最大の品目となったことを明らかにした。

この落花生の対欧米市場輸出は、山東省のなかでも穀物生産に不適な地区での落花生栽培の拡大を促した。山東地域経済の先行研究に基づき、この落花生栽培が間作として導入されたほか、落花生栽培に特化した専業地域を生み出していたこと、また最大の労働量が投入される収穫・脱殻の担い手が農村女性であったことを指摘した。そのうえで、第一次世界大戦以前のこれらの生産拡大が山東経済と世界市場の結びつきを強め、また 1930 年代の世界恐慌期に言及することで、結果として世界経済の変動に大きな影響を被りやすい経済構造へと変化したことを論じた。

(4) 山東鉄道と津浦鉄道の物流競争

19 世紀末以降、落花生に代表される山東農畜産品は、欧米を中心に世界市場向けの輸出を拡大させた。その山東農畜産品の輸出ルートは、ドイツ資本が山東鉄道を敷設し経営することで、自明のごとくドイツ統治下の青島港を経路としたわけではなかった。とくに、1910 年に華北最大の対外貿易都市天津が、津浦鉄道によって、山東物産の最大の集積都市であった省都済南と、青島よりも短い距離で結びついたことは、青島港を統治するドイツ当局や山東鉄道会社にとって脅威と感じられた。そして、ドイツ資本の山東鉄道と中国国営の津浦鉄道との間で、運賃の価格設定などによる山東物産をめぐる激しい競合状況が生まれたのである。

上述のドイツ現代史学会大会報告および日韓歴史家会議で発表するに際して、これに関連する史料を整理し、分析を行った。そして、このような競争状況を通じて、山東経済が世界市場との結合を深めたことを主張した。また、今後の課題として、世界恐慌期の山東経済の分析が重要となるという認識をえた。

(5) その他の成果

その他には、2013 年に高嶋修一・名武なつ紀編『都市の公共と非公共』のなかで「ドイツ統治期青島経済にみる『公共』と『非公共』山東農産品輸移出の流通を中心に」を発表した。同論文で、本科研プロジェクトに関連する成果として、1907 年・1908 年のアメリカ合州国で発生した金融危機が青島港経済に与えた影響と、その危機への地域経済の対応を、山東鉄道・青島港と在来流通の関係から明らかにした点が挙げられる。

また、2014 年にはパリで開催された国際歴史学会議委員会主催の第一次世界大戦に関

するシンポジウムで、“The Siege of Tsingtao in 1914”と題する発表を行った。この発表では、第一次大戦時のドイツ総督府史料に主に基づき、山東鉄道および青島での日独間の戦争について論じた。また、この成果は、2016年に *monde(s)* という学術雑誌に、雑誌論文として掲載された。

さらに、2015年に京都で開催された世界経済史会議では、“Exploring North China in the Age of the ‘New’ Geography: From the Perspective of German-Japanese Relations”と題し、華北をめぐる日独の地理学的認識について論じた発表を行った。この発表を準備する際に、ドイツと華北の経済的結びつきの拡大が地理認識に反映される過程を、主に同時代文献に基づいて明らかにした。

今後の課題として、本科研プロジェクトを通じて収集した史料の分析はまだ中途の段階にあることが挙げられる。今後、史料分析を深め、その成果を学会誌で活字化していく予定である。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計 1 件)

浅田 進史、The Siege of Qingdao: Mobilization and War Experiences in a German Leasehold in China during World War I、*monde(s)*、No. 9、2016、pp.75-92

〔学会発表〕(計 4 件)

浅田 進史、ドイツ植民地経済政策における世界的視野 山東落花生から考える、第15回日韓歴史家会議「植民主義と脱植民主義 世界史的視野」、2015年11月6日 8日、ソウル大学中央図書館

浅田 進史、Exploring North China in the Age of the ‘New’ Geography: From the Perspective of German-Japanese Relations、XIIth World Economic History Congress、3-7 August 2015、Kyoto International Conference Center

浅田 進史、The Siege of Tsingtao in 1914、International Committee of Historical Sciences, Colloque International “From the Balkans to the World: Going to War (1914-1918). A Local and Global Perspective”、15 November 2014、UNESCO

浅田 進史、19世紀グローバル化のなかのドイツ山東事業 物流と植民地権力の関係性を中心に、ドイツ現代史学会第36回大会シンポジウム「ドイツと東アジア 日独比較史から独亜関係史へ」、2013年9月21日 22日、福岡大学中央図書館

〔図書〕(計 2 件)

浅田 進史 他、岩波書店、第一次世界大戦開戦原因の再検討 国際分業と民衆心理、2014、256 (69-88)

浅田 進史 他、日本経済評論社、都市の公共と非公共 20世紀の日本と東アジア、2013、277 (23 56)

6. 研究組織

(1) 研究代表者

浅田 進史 (ASADA, Shinji)

駒澤大学・経済学部・准教授

研究者番号：25780220